

西部エリア

本莊重政と松永塩田 製塩で松永を拓く

「町は七島 入江の枝に 四十八塩田の あれや塩烟」と歌われた松永塩田も、今は埋め立てられ、住宅や工場となつています。七島を区画していた入川も、改修や埋め立てが行われ、かつての面影はなくなりました。

松永塩田の築造は、1660年(万治3年)、本莊重政の指導によって着手されました。それ以前の松永湾は、袋の海と呼ばれ、遠浅の海が深く湾入していました。ここを干拓して塩浜を築くという発想や技術は、播州赤穂に



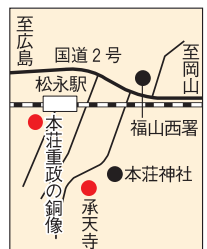
松永塩田
昔の入浜式塩田の様子です

範をとつたものと思われます。それは、兵法修業のため諸国を流浪していた重政が、49歳で福山に帰藩するまで、何度か赤穂へ立ち寄っているからです。ただ、製塩技術については、後の資料に「竹原屋」という屋号が多く見られることなどから、竹原塩田に学んだと考えられます。

1667年(寛文7年)、8年の歳月を費やして、東西15町(1,700m)、南北10町(1,100m)の新涯が誕生し、たちまち一村を形成しました。長和島、本郷島、今津島などの地名は、干拓工事に従事した人々か、そこに居住した人々の出身地を語っているようです。重政は、この新涯を「松永永年」にちなんで、「松永」と命名し、自らも居宅を高須から現在の本莊神社の地へ移し、松永永住を決意しています。



松永駅南口の本莊重政の銅像



それから9年後の1676年(延宝4年)、重政は「身を捨てて廬に帰る我が心尋ぬる宿も今ばかりなり」という辞世の歌を残して71歳の生涯を終え、承天寺に葬られました。

承天寺は本莊家の菩提寺で、書簡、彫刻、絵画など重政の遺品が多く残されており、「本莊(莊)家文書」は市の重要文化財に指定されています。また、白壁の土堀に囲まれた墓域は県史跡に指定され、右に八角柱形の重政の墓石、中央に子の重尚、左に弟重幸の各墓石が並んでいます。

この墓地のある高台から、かつての四十八浜の塩煙を見ることはできませんが、重政は今も松永の行く末を見守っているかのようです。

(1993年11月号に掲載)

今津の宿と本陣跡 当時の面影が残る町

今津の地元で、王子さんと呼ばれる王子山は、かつては近くに住む子どもたちの絶好の遊び場でした。しかし、そこに新羅の王子の館があったという伝説は、あまり知られていないようです。

『剣大明神由来記』は、今津の浦に漂着した新羅の王子のために、庄司田盛が当浦の西の山上に御殿を建てて、手厚くもてなしたと伝えていきます。この「当浦の西の山」が王子山と考えられ、王子の宮、武の宮が祭られています。



今津本陣跡
備後領内の本陣は、神辺とここ今津の2か所だけです

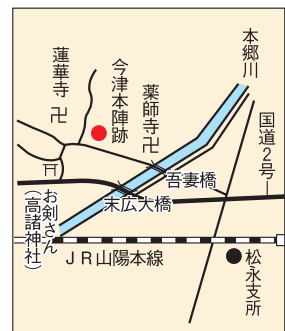
した。

この王子山から、蓮華寺の北の土堀に沿って東に200mほど行くと、本陣跡に突き当たります。屋敷内の建物は、明治4年(1871年)の百姓一揆によって焼失し、当時の面影を残すものは、18世紀末に建てられた表門のほかは、石垣と土堀だけになっています。しかし、邸内にあった牡丹園は有名で菅茶山や頼山陽などによって、その美しさが漢詩に詠じられ、牡丹の本陣とも称されたということです。現在その敷地の一部が「今津本陣跡」として福山市の史跡に指定されています。

なお、宝暦年間(1750年代)に書かれた『中国行程記』には、「此辺昔海にて汐入て瀉の所寛文年中(16



お剣さん(高諸神社)
お剣さんの本殿への階段を上ってすぐ左に、田盛神社が鎮座しています



60年代)開作と成、往古は往還当所の山麓に有之由、開作已後今の新道往還となり」と記されています。これによると、薬師寺の山門前を通り、本陣跡の北へ下る細い道が今も残っていますが、その山麓の道が旧往還だったこととなります。

脇本陣だった蓮華寺は、安永6年(1777年)東にあった正面参道を南に付け替える願い書を、奉行所に出しています。寛文年中から100年経ち、今津の町並みもほぼ新道往還に沿って形成されたことを示しています。

千本格子の町家や旅籠のあとが、今も残る今津の宿をゆつくり散策してみてください。お剣さんはもちろんのこと、陰陽石神社や太多理河など思わぬ文化財に出会えるはずですよ。

(1994年2月号に掲載)

お剣さんとハクの木 迫力ある石積みと大木

陰暦6月25日からの1週間、お剣さんの境内は浴衣姿の人の波で埋まりま
す。かつては汐間の市と呼ばれた祭
礼で、近年まで船での参拝も多く、境
内の池には、船着場跡として、雁木が
残されています。

東西の池を結ぶ水路に架かる石橋に
は、「安永八年三月」（1779年）の
刻印があり、200年以上の歳月、た
くさんの人々の通行を支え続けてきま
した。また、石橋には高諸神社の刻
印もあり、古文献には「剣大名神」と
見えますが、古くから「高諸神社」と



ハクの大木
樹齢は推定約300年といわれています

称されていたようです。

本殿のある小山は、元は松永湾に浮
かぶ小島でした。周囲には、海岸の岩
場を思わせる巨岩が累々と連なり、そ
の巨岩を利用した石積みは豪快です。

正面石段の右には、弁才天が祀られ
、両脇に「元禄七甲戌年五月」（169
4年）と刻まれた、境内最古の石灯ろ
うが一对あります。巖島の弁才天が、
新羅王ら3人の乗った空穂舟をここま
で守護して来たという伝説との関わり
も考えられます。

また、拝殿のすぐ西には「宮島さん」
と呼ばれる、円形に配された立石や平
石があり、磐境（神のよりどころ）を
思わせます。中心をなす立石は、その
昔金輪際から出現した剣の形をした石
であるとも伝えられ、神社の古い形を



雁木と石橋
その昔、海に浮かぶ小島であったこと
をしのばせます



残しているようです。ここにも元禄8
年（1695年）建立の石灯ろうが一
対あります。その側には机石と呼ば
れた平石が配されていましたが、本殿
改築記念碑の台石に転用され、その後
には、舟形の石が祀られています。

本殿は見事な切石の石積みの上に
建っていますが、裏手に回ると、岩盤
に根を張ったハクの大木を間近に見る
ことができます。芯は枯れています
、それに巻き付くように幹がうねり、縦
横に枝を広げています。昭和43年（1
968年）「高諸神社のハク」として、
市天然記念物に指定されました。この
ハクを見ていると、大伴旅人が「磯の
上に根這ふむろの木」と歌った、むろ
の木は、まさにこれだという感じを抱
かせます。

（1994年6月号に掲載）

松永の共同井戸 水との闘いを克服して

干拓地松永の歴史は、水との闘いの歴史でもありました。

1667年(寛文7年)に松永塩田が完成すると、塩田で働く人たち、塩や魚を商う人たち、入替船で働く人たちが、東部の山裾(まきそ)を中心に集まり(現在の東町)、松永村が誕生しました。

人が集まり住めば、生活用水が大きな問題となります。松永誕生の時は、浜池を築造し、木樋で東町の各溜井戸



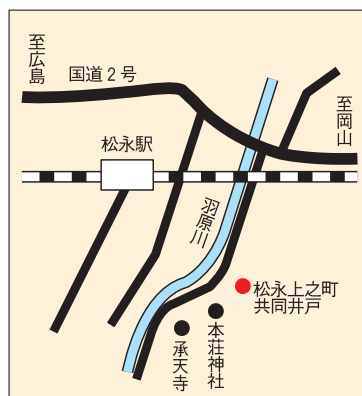
松永上之町共同井戸
松永の人々にとって、かかわりの深い井戸として親しまれています

へ送水したといわれています。その後は羽原川を水源として、判屋河(はんや)や新河などの溜井戸に土管を使って送水し、生活用水の確保に努めたのです。こうした「河」と呼ばれる溜井戸は、今日でも東町のみならず、西町でもいくつか見かけることができます。

一方で、人々は水脈のよい山裾に井戸を掘り、生活用水を確保しようとしてきました。その一つが、市の史跡に指定されている松永上之町共同井戸です。本荘神社(ほんじょう)の下の道端に、花崗岩(かこうがん)を六角形に組んだ井戸枠が目に残ります。蓋(かた)をしてあるので内部は見えませんが、調査の結果、胴(たね)が張りだした円形で、深さ約5m、直径約4mの見事な作りだということが分かりました。周りも花崗岩の広い石畳でしたが、1980年(昭和55年)の集会所建設に伴い、コンクリートで覆われてしまいました。



井戸改修碑



井戸が掘られた時期は明らかではありませんが、『備陽六郡志』に著者宮原直御(みやのちか)の「松永の図」があり、その中にこの共同井戸が描かれていることから、18世紀の半ばにはすでに存在していたことが知られます。この共同井戸は、地元では鍛冶屋河(かじや)と呼ばれています。1954年(昭和29年)に上水道が敷かれるまでは、井戸端に近くの人々が集まり、世間話に花を咲かせたことでしょう。

このように「河」と呼ばれ、親しまれた松永の共同井戸は水との闘いを克服し、松永の繁栄に大きな役割をはたしました。

(1994年10月号に掲載)

馬取遺跡

縄文時代の生活の跡

松永湾は、波静かな遠浅の入海で、その湾岸には、縄文時代の人々の生活の跡が点々と確認されています。貝塚を中心とした馬取遺跡もその一つで、1959年（昭和34年）には広島県史跡に指定されました。

馬取遺跡は、柳津町の東端に位置し、標高221mの竜王山から南に延びた丘陵末端部の台地上にあります。貝塚が保存されている台地の周りは、一段低い畑地になっていますが、かつてはほぼその高さで台地が広がっており、海浜に接していたと考えられます。今



市内で貝塚の貝層が見られるのはここだけです

は削平されてしまいましたが、その西にも同様の貝塚が存在し、馬取西貝塚と呼ばれていました。現在保存されているのは、東貝塚の一部で、西貝塚との間には、貝類や土器片、石器などの遺物を含む層がありました。これらは同じ台地上にあつて、密接な関連を持っていると考えられ、まとめて馬取遺跡と呼んでいます。

遺跡からは、カキ・ハマグリなどの貝類や魚骨、イノシシ・シカなどの動物の骨をはじめ、早期から晩期（約8千年前～3千年前）に至る縄文土器、石鏃や石錘などの石器が出土しました。これらの遺物は、馬取の縄文人が、狩猟と漁労の両方を生活の糧としていたことを物語っています。

縄文土器のほかにも、須恵器・土師器・師楽式土器が少量出土しています。



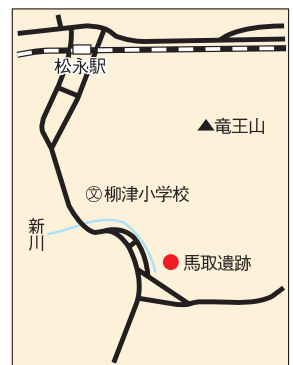
遺物は福山城博物館に展示してあります

いずれも古墳時代（4世紀～7世紀頃）以降の土器で、特に師楽式土器は製塩に使用されたと考えられ、松永湾岸で古墳時代から製塩が行われた可能性を示唆しています。ただ、その間に挟まれた弥生時代（紀元前3世紀～3世紀頃）の遺物が出土していないため、そこに空白の期間があったかどうかの究明が、今後の課題といえます。

遺跡の近くには、縄文土器とともに土偶を出土した下迫貝塚や、対岸には縄文人の骨を多数出土した尾道市高須町の太田貝塚などがあります。

竜王山に登れば、松永湾が一望できます。当時の海岸線はもつと山際に入っていました。山頂から遠く縄文時代に思いをはせるのも楽しいものです。

（1995年4月号に掲載）



本郷神楽

江戸時代の面影を残して

神楽は、各神社の秋祭りに豊作を感謝して奉納されるものです。

1819年（文政2年）に菅茶山が福山藩の命を受け編集した『御問状答書』には、江戸時代末期に備南地方各地で、氏子による里神楽が盛んに上演されていたことが記されています。

今も市内には、30ほどの保存団体が残っています。中でも本郷町の本郷神楽は、江戸時代の古形を随所に残しており、広島県無形民俗文化財に指定さ



八幡神社大祭の様子

れています。

本郷神楽はもともと同町の横町荒神社（現在は本郷八幡神社に遷座）の祭礼の一部で、6年おきの丑歳と未歳に奉納されてきました。明治初年につくられた地図によると、神社前の畑地を「神楽場」と定めており、当時ここで上演していたことが分かります。

いづころから氏子による本郷神楽が始まったのか明確ではありませんが、皮張り替えの際に神楽太鼓の胴の中に『太鼓新調弘化四年（1847年）未七月』と墨書があるのが確認されています。残っている神楽面や衣装にも江戸時代を推定されるものがあります。これらのことから江戸時代後半には



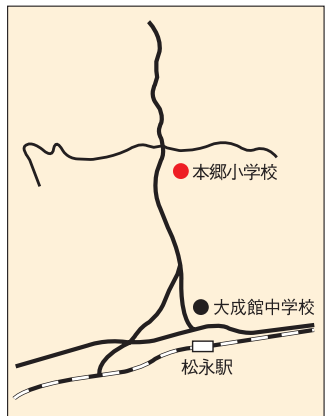
「剣舞」を踊っているところです

盛んに行われ、今日まで途切れることなく継承されてきたことが分かります。

現在、本郷神楽の演目は15種類伝承されています。太鼓・胴拍子・横笛の音色が響く神妙な雰囲気の中で、神の降臨を促す「場払い」「神迎え」「神降ろし」、4人が互いの剣先を持ち激しく舞い踊る「剣舞」、神話伝説を劇化舞踊化した「四本舞」「王子舞」などです。これらは『御問状答書』に記載されている演目の記述・神楽図の挿図と符合します。

以前は夜を徹して上演されていたようですが、現在では式年の祭礼のほか、毎年11月の第1日曜日に本郷小学校体育館で開かれる地域の文化芸能祭で、演目の一部が披露されています。

（1995年10月号に掲載）



松永湾岸の古墳群 古代遺跡の密集地

古代の松永湾は、海が山すそまで湾入し、海沿いには、柳津町の馬取貝塚に代表される縄文時代の遺跡が点在していました。古墳時代に入っても、海に面した丘陵上に点々と古墳群が形成され、その当時から松永湾岸が重要な生活の場だったことを示しています。その中でも特筆されるのは、共に県史跡に指定された「松本古墳」と「長波古墳」です。

神村町の松本古墳は、標高約15mの丘陵突端に築かれた、直径約50m、高さ約7mの円墳です。採集された円筒や水鳥形の埴輪、須恵器の破片などか



西の塚古墳の石室

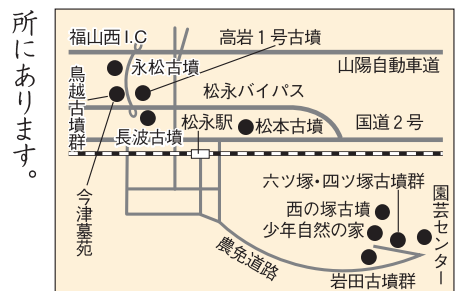
ら5世紀後半の築造が想定されますが、この時代の備後南部では、突出した大規模な墳丘を持っています。

一方、今津町の長波古墳は、標高約40mの丘陵南端に築かれ、松永湾を眼下に望むことができます。墳丘の直径約18m、高さ約4mの円墳で、主体部は古式の横穴式石室を持ち、側壁は径50〜60cmの花こう岩をドーム状に積み上げています。被葬者は、おそらく6世紀前半から中ごろ、この地域で最初に横穴式石室を導入した人物と思われるです。

この長波古墳の背後には、高岩古墳群、鳥越古墳群などいずれも横穴式石室を持つ6世紀後半の古墳10数基が密集しています。中でも「高岩1号古墳」と市史跡「永松古墳」は石室、墳丘ともよく残っており、見学にも便利な場



長波古墳の石室



所にあります。

金江町にも、岩田古墳群、六ツ塚古墳群、四ツ塚古墳群などがあります。湾東部の古墳密集地となっています。園芸センター西の畑の中に、これらの古墳が点々と口を開けていますが、今は私有地なので勝手に入ることができません。その中で一番西に位置しているのが、「西の塚古墳」で、唯一発掘調査が実施されています。6世紀後半の直径8mほどの円墳ですが、鉄滓が副葬されていたため注目されました。このように、松永湾岸は、市内でも古代遺跡密集地の一つに数えることができます。

(1997年12月号に掲載)

日本はきもの博物館

コーヒーハウス

JR松永駅から東に歩いて5分、れんが色が鮮やかな「日本はきもの博物館」の入り口右手に、大正期の本格的洋風建築物があります。「日本はきもの博物館コーヒーハウス」です。

現在、はきもの博物館の喫茶店として利用されているこの建物は、1922年（大正11年）かつて下駄の生産で活況を呈した旧丸山茂助商店の事務所として建てられました。

この建物で目をひくのは何と云っても装飾の美しさです。柱の頭部と壁や軒下には、しやれた洋風の装飾がみられ、屋根を囲うように少し壁を立ち上



日本はきもの博物館
コーヒーハウス

げたパラペットにも飾りや社章が施されています。他にも、正面玄関上の手すり付きのバルコニーや、1階は縦長方形、2階はアーチ形になっている窓が特徴です。

一見気品のある石造りの印象を受けますが、実は構造は木造モルタル2階建ての建物です。現在は銅板葺きの屋根も当初は寄棟の棧瓦葺きだったので

このような和風建築をベースとし、洋風の外形をさまざまに取り入れた擬洋風建築物は明治以降、日本人大工によって全国各地に建てられました。

この建物は、地元松永の大工の棟りよう横山善吉による施工であると伝えられています。彼は大阪に出ていち早く洋風建築に取り組み、伝統的な和風建築技術をもとに、洋風の技法を取



軒下部分の装飾

り入れ、松永に数多くの擬洋風建築物を生み出していきました。

松永は当時、下駄のまちとして発展し、1914年（大正3年）に生産された「松永下駄」は一千万足を超えるほどでした。販路は北海道から九州まで全国各地におよびました。当時の丸山茂助商店は「松永下駄」生産の中心的存在であり、そういった時代背景の中で、この建物は誕生したのです。

近代化の波の中で失われていく近代の建造物を保護するために、1996年10月から「登録文化財制度」が施行されました。「日本はきもの博物館コーヒーハウス」は、福山市での登録第1号となりました。



（1998年7月号に掲載）

金江小学校教育資料館 明治の校舎の玄関を保存



金江小学校教育資料館

金江小学校の校門を入り、校舎の裏手に回ると、教育資料館があります。玄関横の説明板には「昭和54年、金江小学校校舎改築にあたり、『明治37年に建築された校舎の玄関を保存してほしい』という金江町民の願いと市当局のご理解により、昭和56年に教育資料館として建てられたものである。この玄関は当時の玄関そのままの建物である。昭和56年4月8日」と記されています。

古い写真を見ると、正面玄関の左右に木造の校舎が延びていますが、その校舎部分は取り壊され、教育資料館を建てるときに玄関だけが残されました。資料館前に立つと、まず玄関の立派さに驚かされます。唐破風造りの屋根に鬼瓦が乗り、兎毛通や頭貫・幕股にははいねいな彫刻が施されています。明治37年の建築ですから、すでに100年を越える年月が経過していますが、保存状態は良好です。かつては、福山市内にも、このような玄関を持つ校舎がたくさん見られたのですが、現在残っているのはここだけです。引戸を開けると、左手に教科書がずらりと並んでいます。明治初年の国定教科書から戦後の検定教科書まで、教科書の移り変わりが一目で分かります。珍しいものでは、明治時代の試験問題が残っています。



明治時代の教科書

右手奥には、柳津町の馬取貝塚や金江町周辺の古墳からの出土品が展示してあります。その手前には、火のしや柳ごおりなどの生活用具、おにまんがや田植なわなどの農具も置かれています。



そのほか、校舎の変遷や児童の服装の移り変わりを記録した写真とか、戦争中の勤労奉仕作業の写真なども展示してあります。

これらの資料は、資料館として活用するという方向が出た時点で、広く金江町内に提供を求めて収集されたものです。なお、教育資料館を見学される場合は、必ず金江小学校の許可を受けてください。

(1998年9月号に掲載)